

本日が「前期選抜出願書類受付」最終日となる。前々号ではG君を、前号ではTさんを紹介した。今号ではY君を紹介する。

Y君が中学2年生、3年生のときの担任が私だった。彼は目立つ方ではなかったが、野球部に所属し、やるべきことを地道にやっけていくまじめな生徒だった。中学3年生の1月となり、私立高校の受験が始まった。彼の志望校は県立高校であったが、いわゆるすべり止めとして私立高校も受験した。すべり止めは合格しなければならない。しかし、結果は不合格であった。

ショックである。弱気になる。志望校を変更したくなる。Y君は意気消沈してしまい県立高校の入試に向けてがんばる気力も出ない。本人に意欲がなければまわりがいろいろ心配しても結果は出ない。Y君の脳裏には志望校変更の5文字がよぎったはずである。確かにそうするのは簡単である。だが、私は彼を励まし、「志望校を変えずにこのまま最後までがんばってみないか」という提案をした。私立高校に合格していないのだから、形としてはいわゆる県立一本である。がんばろうとする気持ちの前に不安との戦いである。彼が出した結論は、そのまま志望校を変更せずがんばるといったものだった。

ここから県立高校の入試の日まで、彼との二人三脚が始まった。週ごとの綿密な学習計画を立て、それこそ一日一日を大切にしていっていった。もう後がないのである。背水の陣である。この頃のY君の精神状態は経験した人でないとわからないだろう。絶対に合格してやるという強い気持ちよりも大きな不安に押しつぶされそうになっていたにちがいない。だから、受験勉強を彼の主体性に任せるのではなく、私がコーチ役となり引っ張っていった。

そして入試の日がやってきた。無事に終わり合格発表の日までの数日間をY君はどのような心持で過ごしていたのだろう。結果は合格だった。担任として、うれしさよりも安堵感が勝っていた。志望校で自分の受験番号を目に焼き付けてきた彼が笑顔で意気揚々と中学校に報告にきた。二人で抱き合って喜んだことを涙したことを今でも覚えている。

それから何年もたち、同級会が開かれ、私も呼ばれた。懐かしい面々の中にY君の顔があった。会が進み、昔話に花が咲いていたところ、彼が私のところにきてくれた。そして「高澤先生、僕はあのときの先生の言葉でがんばることができました」と話してくれた。高校に入ってから現在に至るまでの報告も聞くことができた。りっぱな社会人になっていた。

これはあくまでもうまくいった例であって、この同級会では「先生は、あのときああ言ったけれど～」などと、こちらが指導されてしまうこともあった。それもいい。教え子たちから教わることが多いのが事実である。教育の本当の成果は後になってからわかるものである。

高校入試というと、今でもY君のことが思い出される。彼の他にも一人一人にドラマがあった。それが高校入試である。多くの生徒にとっては人生初の大きなハードルとなる高校入試。そのハードルの高さにうろたえる生徒もいることだろう。だが、ひるむことなく前に進むしかない。「出願」というものは、もう前に力強く進むしかないという覚悟を決めるためのものである。

うまくいくためには何事も戦略が重要である。3月4日（水）の当日まで、入念な計画に基づいた努力の積み上げがなされることを期待したい。